參候へと、堀久太郎、長谷川竹、以二兩人一御觸也、總見寺毘沙門堂御舞臺見物申、おもて之御門より三ノ御門之内御殿主ノ下御白洲まで祗候仕、爰にて面々被二加御詞一、先々次第の如く、三位中將信忠卿、北畠中將信雄卿、織田源五、織田上野守信兼、此外御一門歴々也、其次他國衆各階道をあがり、御座敷之内へめされ、忝も御幸之御間拜見なさせられ候也、御馬廻甲賀衆など、御白洲へめされ暫時逗留之處、御白洲にて皆々ひえ候はん之間、南殿へ罷上、江雲寺御殿を見物仕候へと上意にて、拜見申候也、

〔豐臣秀吉譜上〕天正十一年正月元日、秀吉趣二播州姫路一、二日賜二酒肴銀子及粮米于諸士一、使賞春肇也、諸士大悅、張宴遊樂、自旦至二中宵一、然秀吉不二敢休憩一、召二執簡者二三人一、使記二年年之恩祿太刀衣服粮米等之費一、乃定二監吏十人一、其後喫二朝飯一而熟臥、至二三日亭午一而眠覺、氣色頓新、將拉鬼、然後受二諸士之賀禮及神職僧徒等一、

〔豐臣秀吉譜下〕文祿二年正月、秀吉在二名護屋一、群臣獻二正旦之賀儀一、時城州八幡山暮松新九郎、爲告二正辰之賀祝一、故來二于名護屋一、

〔武邊咄聞書七〕利家景勝年頭之禮式相論の事

一聚樂御城にて、秀吉公年頭の御禮御受の時、上杉景勝より先、前田利家出給ふを、景勝押て、同宰相にて我は先官也、貴殿を先へいだす間敷と有、利家は先へ出んとす、景勝せいて已に利家と刺違んとせられしが、堀尾帶刀、中村式部扱事濟、秀吉公の御前にての事也、景勝本國へ系圖を申遣し、京へ被二取寄一、其内利家を中納言に被二仰付一、故、何事もなき也、

〔玉露叢二〕慶長六年正月朔日、内府家康公、秀頼公ニ御對顔、歳首ヲ賀シ玉フ、今日、天下ノ牧伯、内府公ヲ拜シ奉リケリ、

〔家忠日記追加〕慶長十三年正月二日、此日秀頼より、織田左門頼長歳首の使として、駿府に來賀す、